

NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

July 2008 vol.7



島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「KITTY EX. ハローキティとアート ファッションの幸福なコラボレーション展」

ハローキティというキャラクターの魅力

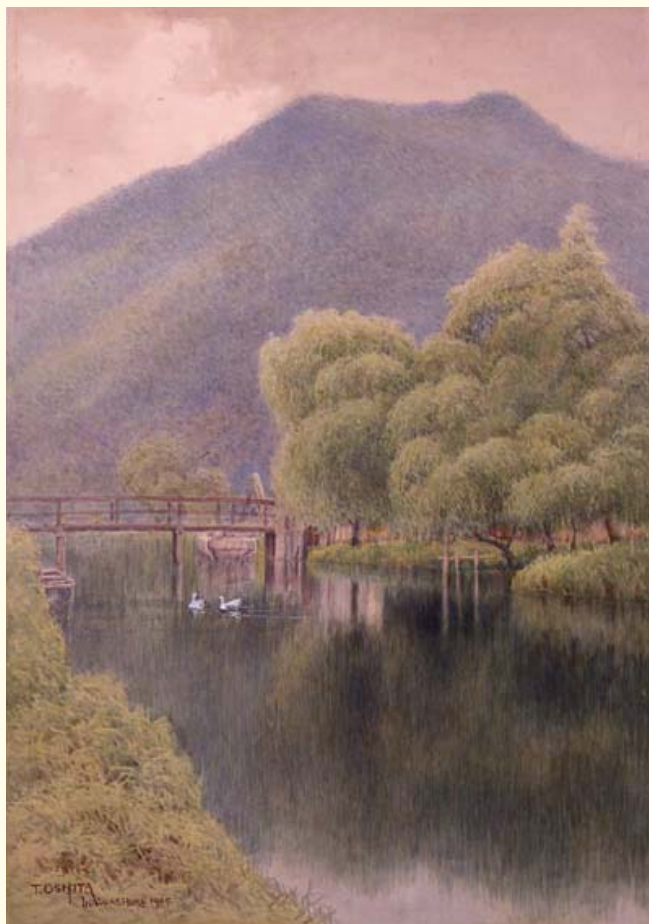
企画展「なつかしの風景 大下藤次郎の水彩画」

表現者、大下藤次郎

特別展「ポワレとフォルチュニイ コルセットをめぐる冒険展」

ファッションデザインとアート ポワレの場合

7



大下藤次郎《猪苗代》
明治40年 当館蔵

「KITTY EX. ハローキティとアート ファッションの幸福なコラボレーション展」

2008年7月18日(金)～9月23日(火・祝)

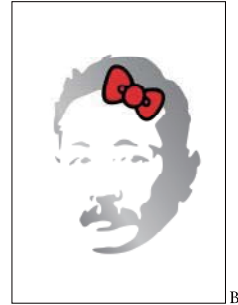
休館日:火曜日 開館時間:午後10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)



©1976,2008 SANRIO CO.,LTD./KASIMA SATO



A. 八谷和彦+ペットワークス《HELLO KITTY meets PostPet V3》
© 76, 04 SANRIO ©1996-2007 So-net Entertainment Corporation



B. グルーヴィジョンズ《GRV2166》
© 76, 04 SANRIO/GROOVISIONS

ハローキティというキャラクターの魅力

1970年代生まれの筆者の世代は、子どもの頃からキャラクターグッズに囲まれて育った。玩具売り場や子ども向けの文具などをあつかう雑貨屋のような店に行けば、キャラクターがあしらわれた玩具や文房具が所狭しと並んでいたし、また子ども向けの服や靴にもキャラクターが付されていた。子どもたちが日常的に使うモノは、キャラクターによって付加価値を与えられ、そうしたグッズは子どもたちの所有欲を絶えず刺激した。やがて、子どもの頃にキャラクターグッズに親しんだ世代が成長すると、それにあわせるように、10代、20代を対象とするグッズが登場し、これもまた人気を博す。大人であってもキャラクターグッズを身にけるのは珍しいことではなくなった。今やキャラクターは、私たちの生活に根付き、浸透したと言ってよいだろう。

「かわいらしく、多くの人に愛される」というキャラクターの特質を多くの人が理解する現在、企業はもちろんのこと自治体までもが、キャラクターを次々と創り出すようになった。お役所主導となると、案を市民から募ることも多く、プロのデザイナーではない人のプランがそのままキャラクター化される場合もある。これらは「ゆるキャラ」などと呼ばれ、その存在に注目が集まっているが、それはキャラクターとしての完成度の低さ、つまりその「ゆるさ」が逆に評

価されているということだろう。いっぽうで、企業のしっかりとしたプロデュースによりつくられた「ゆるくない」キャラクターもあり、これらも数多く生みだされているはずだが、一過性の流行として終わる場合も多い。長い間愛され続けているキャラクターは、実はそれほど多くない。

今回の展覧会の主役であるハローキティは、時代を超えて愛されている数少ないキャラクターのひとつである。1974年に誕生したハローキティは、女の子向けのキャラクターとして^{※1}30余年の間、根強い人気を保ち続けている。つぶらな瞳、黄色い鼻、赤いリボン、そして丸みのある輪郭線などという単純な要素の組み合わせは、キャラクターとして高い完成度を示している。単純で力強く、そして可愛らしいキャラクターそのものの魅力が、息長く多くの人に愛されている理由の一つだろう。

そうしたハローキティの姿形は様々な商品に展開され、国内だけでなく、ひろく国外でも流通するようになった。今やキティグッズは、先に触れたように、子どもだけでなく、大人も対象とした幅広い世代に向け、また国内外の市場にむけてつくられている。キティをはじめとする日本発のキャラクター人気の高まりは、近年の欧米における日本のアニメ、マンガブームと軌を一にしていると言われている。そうしたブームにより醸成される日本に対する憧

れが、日本製のキャラクターに、さらなる価値をもたらしているのだろう。ともあれ、ハローキティという高い完成度をもった日本生まれのキャラクターが、今やシャネルやルイ・ヴィトンといった欧米のスーパーブランドのロゴと同様に、人々を惹きつけるアイコンとして機能していることをここで確認しておこう。

さて、今回の展覧会だが、商品としては十分に展開されているハローキティを、その魅力を理解するアーティストやデザイナー達の手を借りて違う切り口でみせてみよう、というのがその企画の趣旨である。ハローキティは、例えば、八谷和彦によるポストペットに参加し、同様に人気のあるキャラクター、モモと出会う(図A)。また、グルーヴィジョンズによる作品では、キティのトレードマークのリボンが文豪、漱石の肖像画に組み込まれる(図B)。ここではキティ、ポストペットのキャラクター、漱石などという、誰もが知っているキャラクター同士が組み合わせられている。

私たちになじみ深いハローキティというキャラクターが、アーティストたちの手にかかるほどんなふうに見えるのか、美術館に確かめに来てみてはどうだろうか。

※1 ハローキティのメンズ向けの商品も開発されている。

「なつかしの風景 大下藤次郎の水彩画」

2008年10月10日(金)～12月1日(月)

休館日:火曜日 開館時間:午後10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)

企
画
展



図1



図2



図3

図1.《西山峠》 明治42年 当館蔵

図2.《寄居》 明治37年 当館蔵

図3. 水彩絵葉書 制作年不詳 当館蔵

《寄居》が絵葉書になると、
橋の上の少女がこちらを向き、
前景の舟がなんと、文字を書く欄に变身!

表現者、大下藤次郎

このたびの展覧会では、当館が所蔵する大下藤次郎(1804-1911)の水彩画約200点のほか、油彩画、手記、著書、スケッチブックなどの資料を一堂に公開する。

大下は東京生まれの東京育ち、亡くなったのも東京だ。それなのになぜ石見美術館でこれほど多くの作品を所蔵しているのかと驚かされることもある。その理由は、彼が石見出身の森鷗外と関係の深い人物であり、当館では作品収集方針に「森鷗外ゆかりの美術家の作品」を掲げているからだ。

これまで当館の展覧会でも紹介してきたように、森鷗外は多くの美術家と関わりを持った人物だった。大下はその中の1人であるが、しかし特別な1人である。大下は、鷗外の短編小説「ながし」に実名で、主人公として登場する。また、41歳で急逝した大下の遺作集には、鷗外による「大下藤次郎年譜」が掲載されている。この年譜作成は大下夫人の依頼によるものだが、その人となり好み、彼の人生に興味を持っていたからこそ、鷗外は大下の日記^{*1}や手記を読んでその生涯を追跡し、年譜にまとめるという仕事を引き受け、また小説の主人公にもしたのだろう。

大下と鷗外の出会いは、鷗外の親友であり大下の師である原田直次郎を介してのものであった。大下が入門した時点で、原田は

すでに病気のため存分に筆をふるうことができない状態だったが、週に一度は指導をしていたようだ。大下の日記に「画論及画説余の作画の批評皆千金の語にて裨益少々にあらず」とあることから、主に対話による指導だったこと、そして大下の原田に対する信仰にも似た尊敬の念がうかがえる。鷗外も原田の家に時折遊びに行っていたそうだから、そこで顔を合わせることもあっただろう。

原田が亡くなった明治32年の暮れ、鷗外は小倉に赴任中で、駆けつけることができなかった。いっぽう大下は、原田が療養のため神奈川に転居した後も泊まりがけで見舞に出かけ、亡くなった際には葬儀の手配も行った。鷗外が悔やんだように、晩年の原田は画壇の寵児、黒田清輝の陰にかくれて、その名を忘れられかけていた。原田に最後まで尽くした大下に対して、鷗外は特別の想いを抱いていたことだろう。しかしその年下の友人も明治44年、鷗外より先にこの世を去る。鷗外が大下の年譜のために筆をとったとき、原田との友情も甦ったのではないだろうか。

ところで大下は、展覧会で紹介する美しい水彩画の数々を制作する傍ら、講習会の開催や技法書^{*2}の執筆、水彩画専門誌『みづゑ』の発行などを通じて水彩画の普及に努め、アマチュア画家から絶大な支持を得て

いた。また本の装丁や絵はがきのデザインなどにも優れたセンスを発揮している。

こうした多岐にわたる活躍の裏には、「編集」という行為へのこだわりが見られる。例えば、大下の日記はただ毎日の出来事を書き連ねたものではなく、年の初めに前年を振り返り、項目ごとに記述を整理して清書したものである。また水彩画制作でも、同じ風景のバージョン違いの作品が複数存在するケースがある。バージョン違いの絵画制作は他の画家も行っているが、大下には特にそれが多い。一つのを別の角度から見直し、編み直すことを好んだ大下は、翻訳、歴史小説、年譜などを多数執筆した鷗外と共通する趣味の持ち主だったのかもしれない。

展覧会では大下の水彩画に加え、様々な資料により彼の人間像も紹介する。ひとくちに「水彩画家」といいきれない、「表現者」大下藤次郎のユニークな活動を多くの方に知っていただきたい。

※1 一昨年より当館紀要にて少しずつ紹介しているが、膨大な資料のごく一部にしか及んでいない。旅行や制作の記録にはじまり、購入した衣料や預金残高まで詳細に記述する几帳面ぶりには鷗外も驚いたに違いない。

※2 鷗外が題言(序文)を寄せた初めての著書「水彩画の菜」は、当時のベストセラーとなった。萬鉄五郎など後に一家を為す画家たちも同書に学んだという。

「ポワレとフォルチュニィ コルセットをめぐる冒険展」

2008年9月6日(土)～11月3日(月・祝)

休館日:火曜日 開館時間:午後10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)

ファッションデザインとアート ポワレの場合

今回の展覧会は、20世紀初頭の女性ファッションの変革を先導したふたりのデザイナー、ポール・ポワレとマリアノ・フォルチュニィに焦点をあてた企画である。

今からちょうど100年ほど前に、ふたりはコルセットを着用しない「円筒形」のシルエットのドレスを発表した(図A,B)。これは、19世紀半ばから20世紀にはいるまで主流だった、コルセットによって上半身を締め、クリノリンなどをつかって下半身をふくらます「砂時計型」のシルエットとは全く異なるスタイルである。この斬新なデザインは、時代に合致した新たな女性美を示すものとして、女性ファッションに大きな影響を与えた。

彼らが、時代の変化を見抜き、新しい美意識をファッションデザインにおいて見事に表現し得たのはなぜか。

その理由のひとつとして、彼らがともに、同時代のデザインや芸術運動に強い関心を持ち、そうした動向から多くを得ていたことがあげられるだろう。ふたりはともに、中東からアジアにいたる西洋以外の国々の文化に強く惹かれており、その「異国趣味」は、当時のヨーロッパにおける東洋ブームと同調するも

のだった。フォルチュニィ自身は、画家、版画家、写真家としても活動しており、舞台美術も手がけるなど、アーティストとしての活動も行っていった。いっぽうのポワレは、同時代の芸術家を支えたパトロン兼コレクターであり、またビジネスのうえでは、イラストレーターや装飾芸術家とコラボレーションを行うなど、むしろプロデューサー的な立場で、同時代の前衛的な芸術運動に関わっている。ここでは特に、ポワレのアートとの関わりを紹介しよう。

ポワレが活躍した1900年代から1920年代は、有機的な曲線の特徴とする「アール・ヌーヴォー」の国際的な流行を支えた美意識が変化し、やがてそれが「アール・デコ」様式へと向かうという、その過渡期に合致している。アール・ヌーヴォー・スタイルにかわる、新しい様式の創造が求められるなかで主流となっていったのは、優雅で簡素な形状を特徴とする、古代ギリシアやフランス革命後の総領政府時代(ディレクトワール)のスタイルだった。ポワレは、こうした動向を先導した芸術家たちと近い関係にあった。彼らとの親密な交流が、ディレクトワール・スタイルのドレスの創造をうながすひとつのきっかけとなったと

考えて、間違いはないだろう。コルセットを使用しないこのスタイルは、その縛りから女性を解放することを目的としていたというよりも、むしろ新しい美意識にのっかって創造されたものであったのではないだろうか。

ポワレはまた、いち早く新しい傾向を示していたウィーン工房の動向にも関心を寄せている。生活空間全体を総合的にコーディネートしようとする同工房の理念に共感した彼は、デザイン学校兼工房「マルチース」を立ち上げている。新しいデザイン運動への関心を、自身のビジネスに結び付けたわけだが、ファッションデザイナーがデザインビジネスに進出するのは、当時としては例のないことだった。

ポワレはファッションデザインとアートが相互に影響し合う状況を、より意識的に作り出していた。こうした試みにより、ポワレは時流に乗ることができたのだろうし、結果的に多くの人々に受け入れられるファッションデザインを創造することもできたのだろう。

(南目美輝 当館主任学芸員)



A



B



C

- A. マリアノ・フォルチュニィ「デルフォス」ドレス
1910年代 共立女子大学蔵
B. ポール・ポワレ ガーデン・パーティー・ドレス
1911年 当館蔵
C. ポール・リリーブ「ポール・ポワレの衣装」
1908年 当館蔵